世界分割の科学と政治

――「モルッカ問題」をめぐって――

合田昌史

【要旨】南アジア産の香料は大航海時代の西洋人たちを駆り立てた。なかでも格段に高価だった丁香の原産地モルッカ諸島に先着した（一五一二年末頃）のはポルトガル人であった。ところが、マゼラン（その死後はデル・カノ）率いるスペイン艦隊がモルッカ諸島に寄港し（一五二一年一一月）ビクトリア号が丁香を積載してスペインに帰着（一五二二年九月）。これを契機にスペイン・ポルトガル両王権間に「モルッカ問題」が生じた。この問題を解決するために設けられたのがバダホス＝エルヴァス会議（一五二四年四月一一日―五月末日）である。この会議で両国の航海者や天文学者たちは分界の取り決めに基づいてモルッカ諸島の所有権の所在を、両国の法曹家たちはその占有の現状を論議したが、結果的には何の合意も引き出せなかった。しかしながら、U. Lamb はこの会議は「偉大な科学的事業」となる可能性をもっていたし、少なくとも分界の審議にあたった人々の間には政治を超えた「広範な合意の場」が成立していたと考えている。

本稿では分界に関する共通の認識すなわち「共知」の内容と会議を政治化させた仕組みに注目しながら議論の展開を詳細に検討した。まず、分界に関する共知は二重構造を形成していた。表層にはスペイン有利の共知があったが、深層に有利不利の判断が難しい共知が隠されていたため互いにこれを変造して対抗した。しかも、この二重の共知は「対蹠分界」の理念という政治性の強いもうひとつの共知のうえに成立しており、それは新たな分界論への途を閉ざしていた。Lamb 説に反して政治は共知の担い手たちの言動に強い影響力を及ぼしていた。

史林　七五巻六号　一九九二年一一月

はじめに

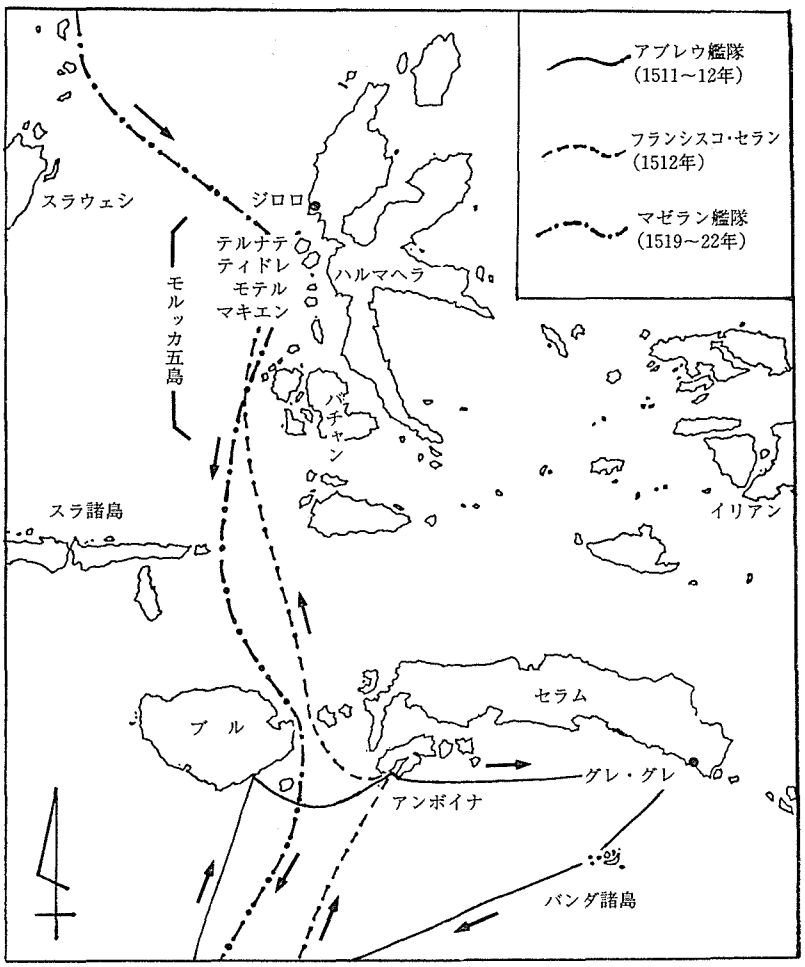
一六世紀スペインの年代記家フランシスコ・ロペス・デ・ゴマラは、一五二四年四月スペイン・ポルトガル両王権の代

表者たちが国境の町バタホスとエルヴァスに集ったある会合に関連して、次のような逸話を伝えている。

ある日ポルトガル人たちは〔国境を流れる〕グアディアナ川の畔を散策していた。その時ある少年が母親の洗濯した衣類をみていた。その少年は彼らにこう問いかけた。皇帝〔でスペイン国王のカルロス一世〕と世界を分割しようというのはおじさんたちかい、と。彼らがそうだがと答えると、少年はシャツをまくり彼らに尻を見せてこう言った。「それならほら、ここの真中に線をひいてみなよ。」この話はバダホスでも分割（レパルティドーレス）を議論する人々が集う会場でも評判になり大いにものわらいの種になった。①

このトリックスターのような少年がからかっているのはポルトガル代表だけではない。少年は分界すなわちデマルカシオン（Demarcación）の方法を議論すること自体のナンセンスを嗤うのだ。嗤うべき問題設定がポジティブな成果を産みだすはずがない、と。わらいの広がりはこの会合に向けられた同時代のまなざしを物語っている。事実、会合は結果としてなんら合意を引き出せなかった。それゆえ、研究史のうえでも一九一一年のJean Denucéの論考②以来、この会合すなわちバダホス＝エルヴァス会議は論題として不毛であるとみなされてきた。③このような評価がくだされる背景として会議をめぐる政治的文脈を考慮に入れる必要がある。④それは両国間に横たわる重要な懸案、すなわち「香料諸島」とりわけモルッカ五島（現インドネシアの北部マルク諸島）の領有問題である。

よく知られているように、大航海時代の西洋人たちを駆り立てた最大の要因のひとつは南アジア産の香料である。この香料のなかでも格段に高価だったのが丁香（チョウジ）と肉荳蔻（ニクズク）。それぞれの原産地がモルッカ諸島とバンダ諸島（中部マルク諸島）である〔付図参照〕。もともと分界は世界の二等分割を意味するものではなかったが、東インドにおけるポルトガル人の急速な進出を牽制する意味で一五一二年までに「対蹠分界（たいせきぶんかい）」の理念、すなわち分界線を地球の反対側におよぶ「子午環」とみなす解釈がスペインで表明された。⑤だが、一五一二年末にポルトガル人フランシスコ・セランの船（ジャンク）がモルッカ諸島に到達。以後香料諸島におけるポルトガルの「発見」と「先占」は着々と進行するかに思われた。そこに波紋を投げかけたのがマ



香料諸島付近図

ゼラン艦隊のモルッカ諸島寄港（一五二一年一一月）と世界周航の成就（一五二二年九月）である。これを契機に両国王権は先占の現実と対蹠分界の理念を強く意識して「モルッカ問題」の交渉にあたることになった。このような文脈のなかでは会議が両王権の「体面を繕った時間かせぎ」[6]の場に堕したとしても不思議はあるまい。

しかし、このような見方に抗して初めて科学史の立場から会議の積極的再評価を提唱したのはUrsula Lambである。

Lambにいわせると、バダホス＝エルヴァス会議は一六世紀における「偉大な科学的事業となる可能性」を秘めていた。そこでは分界に関する「最先端の理論と最新の情報」がすり合わせられ自由で開かれた議論が展開されるはずであった。たしかに、両王権の意向を受けた法曹家たちの働きかけで会議は冒頭から「政治化」しその可能性の芽はつみとられてしまった。しかしながら、少なくとも分界の審議にあたった両国の天文学者や航海者および彼らの技術顧問として間接的に会議に参加した天地学者（Cosmographer）たちの間にはパトロネジに拘束されない「広範な合意の場」が存在していた、と。そのような場を保証する要因としてLambが重視するのは、海事関係者たちの世界がインターナショナルな絆で結ばれていたこと、そして両王権が一四九五年以降、海事や天地学上の問題を専門家の諮問機関に委ねるようになったことである。[7]

だが、この二つの要因は相補的な関係をとるとは限らない。会議が両王権の諮問機関の延長線上にあるならば、それは両王権の利害をうけてインターナショナルな絆を自ら断ち切り合同の調停機関としての建て前を崩す可能性をもっているからだ。はたして「広範な合意の場」は政治の侵食力を阻めたのであろうか。この点を検証するためにはまずその場において確保されていたと思しき分界に関する共通の認識を明らかにしなければならない。本稿ではトマス・ホッブズ（一六五一年）の言葉を借りて、それを「共知（conscience）」[8]と呼ぶ。第二に共知の担い手たちが「政治化」の仕組みとどのような関係にあったのかを明らかにしなければならない。本稿ではまず対蹠分界線とモルッカ諸島の位置づけに関する共知がマゼランの出国以降どのようなものであったかについて考察する。ついで世界周航以降のモルッカ問題をめぐる両王権の外交戦略を摘出する。以上二つの章で問題の所在を明らかにしたうえで、最後にバタホス＝エルヴァス会議における議論を詳細に検討する。これによってLamb説を批判的に乗り越え、会議における「科学」（すなわち自然に関する知）の担い手と政治の関係について新たな展望を提示したい。

① Francisco López de Gómara, *Historia general de las Indias*, I, BAE, Madrid, 1946, p. 220.〔 〕内の語句は引用者による補足。以下同様。

② Jean Denucé, "Magellan: La question des Moluques et la première circumnavigation du globe", *Académie Royale Belgique, Mémoires*, IV, 1908-11, pp. 391-403.

③ たとえば、J. Serrão, ed., *Dicionario de Histria de Portugal*, I, Lisboa, 1971, p. 271.

④ 政治的文脈のなかで会議を評価する試みとしては、Juan Pérez de Tudela y Bueso, "La especería de Castilla, nota política en la política indiana", *A Viagem de Fernão de Magalhães e a Questão das Moluccas*, Actas do II Colóquio Luso-Espanhol de História Ultramarina, Lisboa, 1975（以下、MMと略す）, pp. 627-87; Luís de Albuquerque & R. G. Feijó, "Os pontos de viata de D. João III na Junta de Badajoz-Elvas", MM, pp. 527-45.

⑤ 合田昌史「デマルカシオンのモラトリアム―一四九四年―一五一五年―」『西洋史学』一六五号、一九九二年、六〇―六一頁。

⑥ O. H. K. Spate, *The Spanish Lake*, Minneapolis, 1979, p. 55.

⑦ Ursula S. Lamb, "The Spanish Cosmographic Juntas of the Sixteentn Centrury", *Terrae Incognitae*, 6, 1974, pp. 52-57, 61-62.

⑧ 水田洋訳『リヴァイアサン（一）』岩波書店、一九九二年、一一九頁。

一　マゼランの仮説と世界周航の経度

ポルトガルの下級貴族フェルナン・デ・マゼラン（マガリャンイシュ）が母国を捨てセビリアに移ったのは一五一七年一〇月のことである。ジョアン・デ・バロスの年代記（一五六三年）によれば、マゼランが変節した理由は俸給加増の願いを国王マヌエルに拒否されたことにある。[1] この時マゼランは西回りの航路でインディアスに到達する航海案を提示したがやはり退けられたという見方もある。[2] この見方は推測の域を出ないが、マゼランがコロンブス同様この航海案をスペインに持ち込んだことはまちがいない。マゼランはインディアス商務院のファン・デ・アランダらを通じてスペイン国王に接近した。[3] スペイン国王カルロス一世は一五一八年三月二二日バリャドリドでマゼランおよびポルトガルの天地学者ルイ・ファレイロと航海に関する協約[4]を結んだ。この協約はマゼランらにポルトガル国王の分界を侵すことなく「我らの分界内で」香料の豊かな土地を求めて「発見」事業を行え、と命じている。その主たる目的地がモルッカ諸島をはじめとする香料諸島であることは明らかだった。この航海に参加したローマ教皇使節の侍者アントニオ・ピガフェッタは事前にマゼラン艦

隊の目的地がモルッカ諸島であるという噂が巷に流れていたと述べている。[5]

むろん、この時点で対蹠分界線とモルッカ諸島の位置関係が明確に知られていたわけではない。カルロス一世が一五一九年五月八日マゼランとファレイロに与えた詳細な指示書は、発見される土地が大西洋の分界線から西へどれだけ離れているか経度で算定せよと命じている。[6] だが、すでにスペインでは一五一二年以降、対蹠分界線はモルッカ諸島のみならず海上貿易の要衝マラッカまでもスペイン圏内に確保してくれるはずだ、という見方が強まっていた。D. Ramos Pérez はこのことがスペイン宮廷におけるマゼランの働きかけの受け皿になったと推測している。[7] ただし、西回り航海の決め手、「マゼラン海峡」の探索は一五一二年以降に限ってもすでに前例がある。ポルトガルでは一五一三―一四年頃、スペインでも一五一五―一六年にブラジルを南に迂回する航路の探索が行われた。いずれも目的を達していない。[8] したがって、マゼランは再度スペイン国王を動かすに足る説得力のある情報を提供する必要があった。マゼランは対蹠分界の理念という受け皿に何をのせることができたのであろうか。

マゼランの分界観は一五一九年九月の出航前に彼がカルロス一世に提出した覚え書[9]にみることができる。マゼランはポルトガル流の経線一度あたり一七レグア半を採用し、分界線までの東西距離三七〇レグア算定の起点をヴェルデ岬諸島の西端サン・アントニオ（サント・アンタン）島に置いた。モルッカ諸島は対蹠分界線の東、二度半から四度の間に位置するのでスペイン圏内である。ただし、マラッカは対蹠分界線の西一七度半のところに位置づけられるのでポルトガル圏内にとどまる。

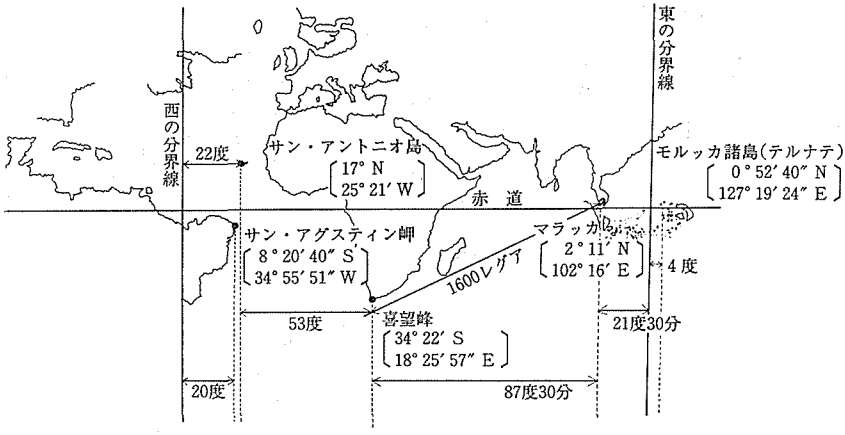
マゼランはこの位置づけにどのような根拠を与えたのであろうか。マゼランは一五一一年のマラッカ攻略に参加した。だが、同年一一月ないし一二月インド総督アフォンソ・デ・アルブケルケによってマラッカから香料諸島の踏査検分のために派遣されたアントニオ・デ・アブレウの艦隊[10]にマゼランが参加したことを示す証拠はない。そこで従来から注目されていたのがジョアン・デ・バロスが伝えるフランシスコ・セランの書簡である。アブレウ艦隊三隻のうち唯一セランの船

はモルッカ諸島のテルナテ島に到達した。セランはテルナラ国王に歓待され軍司令官として同島にとどまった。[11] バロスによると、セランはテルナテ島から「インディアとマラッカで気脈を通じた」マゼランに書簡を送った。そのなかでセランはモルッカ諸島への航海の記述に誇張を加え「マラッカからの航程を二倍にした。」そのためマゼランは「新しい考えをもち始めた。[12]」新しい考えとはもちろん西回りの航路でモルッカ諸島へ向かう企画のことである。セランの書簡は西回り航海案に説得力をもたせたかもしれない。だが、書簡はモルッカ諸島の数量的な位置づけの根拠にはなりえない。そこで次に地図資料を検討する。

コチン発一五一二年四月一日付の書簡によれば、アルブケルケは航海士フランシスコ・ロドリゲスがジャワの航海士の大型地図から引写した海図をマヌエル王に送付した。この海図は現存しないが、「丁香の諸島への航路」や「肉荳蔻と荳蔻花があるジャワとバンダの島々への航路」などが描かれていたらしい。[13] この時ロドリゲスはアブレウ艦隊に航海士として参加していたが、[14] モルッカ諸島に達することなく一五一二年一二月マラッカに帰還。ロドリゲスはその航海の成果をとりまとめた手稿を一五一四年にインドから本国に送付した。この手稿[15]に含まれる海図二六葉のうち六葉はスマトラから東の島嶼部を描いたものである。[16] モルッカ諸島付近の描写に関しては現地の地図に依拠したにちがいない。

このような局地的な資料を世界地理の枠組みにとりこむ仕事の中心的な担い手となったのはポルトガルの地図作成家ペドロ・レイネルとその息子ジョルジェである。ロドリゲス以後初めてモルッカ諸島を記載したポルトガルの世界図はペドロ・レイネル作と推定されている一五一七年頃の地図である。モルッカ諸島はポルトガルの分界内に入ると記されているが、経度の目盛りや分界線は記載されていない。[17] また、レイネル父子とロポ・オーメンの共作とされているいわゆる「ミラー・アトラス（一五一九年）」所収の第七図はモルッカ諸島を含み、そこにポルトガルの旗を立てているが、経度による位置づけは与えられていない。同アトラスの全体像を示す世界図も東西枠の尺度を明示していない。[18]

スペイン側の史料に目を移すと、バルトロメ・デ・ラス・カサス（一五五二―六二年）とアントニオ・デ・エレーラ（一六



世界分割概念図Ⅰ
マゼラン覚え書（1519年）の数値を「クンストマンⅣ」（1516年）にあてはめた。〔　〕内はグリニッジ子午線による現在の座標。

〇一年）は、マゼランは香料諸島をスペインの分界内に位置づけた「地球儀」を航海計画の説明のためにスペイン国王カルロスに提示した、と述べている。[19] だが、バルトロメ・レオナルド・デ・アルヘンソラ（一六〇九年）は、マゼランが用いたのはポルトガル人ペドロ・レイネルの「世界平面図（Planisferio）」である、と言明している。[20] アルヘンソラの記述を裏付けているのはセビリアのポルトガル領事セバスチャン・アルヴァレスが国王マヌエルに宛てた書簡（一五一九年七月一八日）の一節である。「私〔アルヴァレス〕は地球儀と海図（poma e carta）にマルコの地〔モルッカ諸島〕が記入されているのを見た。それは〔ポルトガルを離れセビリアに移った〕レイネルの息子〔ジョルジェ〕が手をつけ、一五一九年はじめ頃彼を探しにやって来た父親〔ペドロ〕が完成させて、そこにマルコの地を位置づけた。」これを「原図としてすべての地図は〔ポルトガル人〕ディオゴ・リベイロによって作られている。[21]」

現存する地図のなかでマゼラン覚え書の内容に近くアルヴァレスがふれているレイネル父子の作品に比定しうるものとしては一般に「クンストマンⅣ」と呼ばれている一五一九年頃の世界図をあげることができよう。「クンストマンⅣ」には大西洋の分界線が引かれ赤道に経度の目盛りが打ってある。モルッカ諸島の西端は大西洋の分界線から東へ一八四度、すなわちスペインの分界内に四度入ったところに位置づ

けられている。[22] この「クンストマンⅣ」にマゼラン覚え書の数値をあてはめたのが「世界分割概念図Ⅰ」である。

以上の考察から推測できることは、マゼランは対蹠分界はモルッカ諸島に対する権利の主張でスペインに有利という噂にセランの書簡で説得力をもたせたが、決め手になったのはモルッカ問題でポルトガル国王に不利に働く可能性のある数量的情報であった。これをレイネル父子またはマゼランがスペインにもちこみマゼランが地図ないし地球儀および覚え書の形でそれをスペイン国王に提示した、ということである。

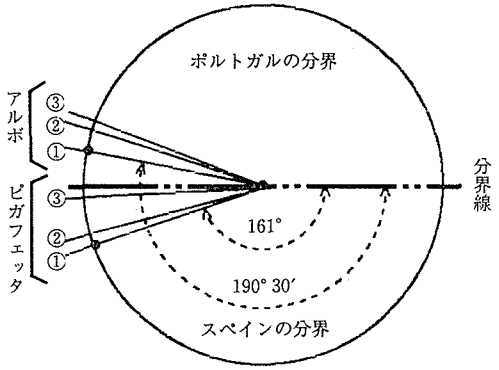
マゼランは指示書で命ぜられたとおり、仮説としての対蹠分界観を経度測定によって実証しようとした。経度算出というきわめて困難な職務を担ったのは艦隊付きの天地学者アンドレス・デ・サン・マルティンであった。五隻のマゼラン艦隊がサンルカル・デ・バラメダ港を出帆したのは一五一九年九月二〇日。アンドレスは天文学的な測定法とりわけ月距法によって同年一二月以降経度測定を実行した。[23] 遠征隊が太平洋の横断で数々の辛酸をなめた後モルッカ諸島に到着するのは一五二一年一一月七日であるが、アンドレスはその半年前に死去している。Laguarda Trias は、アンドレスの死後天文学的な経度測定はなされなかったが、トリニダード号の水夫長フランシスコ・アルボはアンドレスが最後に算出したフィリピンのスルアン島の座標を基準として海図の操作によってモルッカ諸島の経度を引き出した、と推測している。[24] アルボの水路誌によると、モルッカ諸島は大西洋の分界線から西へおよそ一九〇度のところにある。したがって、マゼランの仮説に反して約一〇度ポルトガル圏内に入る。[25] ところが、同じ艦隊にありながらアントニオ・ピガフェッタはまったく異なる数値を提示している。ピガフェッタの報告によると、モルッカ諸島は分界線から西へ一六一度のところにある。[26] したがって、モルッカ諸島は二〇度近い余裕でスペイン圏内に入る。ピガフェッタの数値は意図的に歪曲された可能性が強い。こうして世界周航は相矛盾する二種の位置づけをモルッカ諸島に与えた（付図「世界周航の経度」参照）。アルボとピガフェッタはビクトリア号に同乗して一五二二年九月スペインに帰着した。

世界周航の経度は以後加熱するモルッカ問題の展開にどのような影響を及ぼしたのであろうか。両国の地図はそれ以前

と同様に王権の利害を反映しているにすぎないようにみえる。ポルトガルに帰国したペドロ・レイネルによってビクトリア号帰還の直後に作成されたとされるインド洋海図ではモルッカ諸島にポルトガルの旗が立てられているものの、経度と対蹠分界線は示されていない。[28] 一方、スペインではヌニョ・ガルシア・デ・トレニョがビクトリア号帰還の直後、一五二二年バリャドリドで作成した海図において対蹠分界線はスマトラ島の中央を貫通しており、モルッカ諸島のみならずマラッカを含むマレー半島の大半とその東に広がる島嶼部をすべてスペインの分界内に位置づけている。[29]

ところが、Tudela y Bueso は世界周航によってモルッカ問題をめぐる状況は一変したと考えている。すなわち、ビクトリア号がもたらした情報によってスペイン国王は対蹠分界はモルッカ問題において不利と判断した。対蹠分界の理念を擁護するようになったのはむしろポルトガルの方である、と。[30] この見方は両国王権がアンドレスないしアルボの記録を共有していたことを暗黙の前提にしている。だが、これは認められない。世界周航の記録がビクトリア号帰還以後どのように扱われたかについて補足しておこう。

ビクトリア号と別れたのち太平洋帰航路の発見に失敗したトリニダード号は一五二二年一〇月瀕死の状態でテルナテ島のポルトガル人に拿捕というよりも救助され、航海の器具や記録等を没収された。この時航海の器具や記録はすべてテルナテ島の王室商務員であったドゥアルテ・デ・レゼンデに引き渡された。[31] ジョアン・デ・バロスは帰国したレゼンデから「そのうちの数点を入手したが、とくにアンドレス・デ・サン・マルティン自筆の書物には航程や〔天体の〕高度などの観測記録がすべて記されている」と述べている。[32] レゼンデの帰国は一五三一年頃である。[33] 一方、トリニダード号の船長ゴ



世界周航の経度（1519—22年）
①モルッカ諸島（テルナテまたはティドーレ）
②ティモール　③ブルネイ
（中心は北極点。円周は赤道）

ンサロ・ゴメス・デ・エスピノサと水夫ヒネス・デ・マフラはポルトガル領インドで拘束されたのち一五二六年にリスボンに送致され七ヶ月間の拘留の後ようやく本国に送還されたが、二七年八月マフラはモルッカ問題の供述書のなかで携行していたアンドレスの書物はリスボンで没収されたと述べている。[34] いずれにせよ、本国のポルトガル人が一五二四年のバダホス＝エルヴァス会議の時点でこの記録を入手していたと思わせる証拠はない。他方、アルボとピガフェッタは二二年九月に帰還後ただちにスペイン国王に謁見した。したがってスペインでは会議以前にアルボないしピガフェッタという選択の余地があった。スペイン不利を示すアルボの記録が疎まれたのは当然であろう。アルボはおそらくは恵まれなかったために一五二四年にはスペインから姿を消した。[35] しかも彼の水路誌は一九世紀まで出版されなかった。したがって、アンドレスないしアルボの記録がバタホス＝エルヴァス会議までの時点で両国王権の共有財産となっていたとは言い難い。

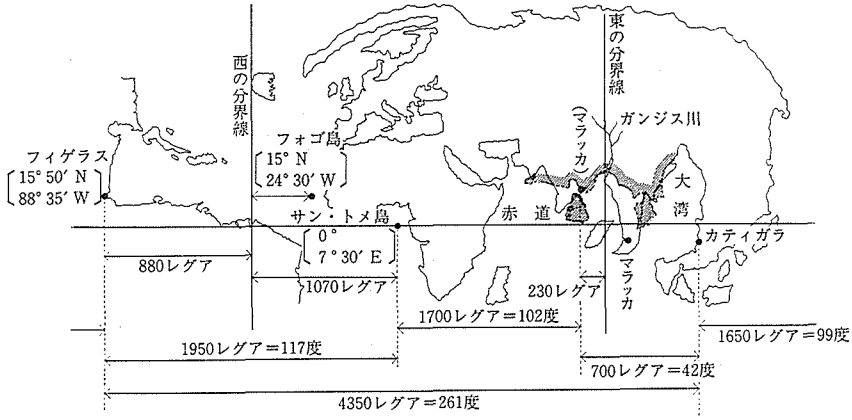
Tudela y Bueso とは逆に世界周航の経度を度外視した見方をしているのは Albuquerque & Feijó である。すなわち、スペインは世界周航以後も対蹠分界の理念はモルッカ問題で有利に働くとみて積極的に分界の実現を訴えたが、ポルトガルは対蹠分界は不利と見てその実現のための議論を意図的に空回りさせた、と。[36] Albuquerque & Feijó がその論拠としているのは当時の地理観を伝えるあるテキストである。そのテキストとは、スペイン人天地学者マルティン・フェルナンデス・デ・エンシソの『地理学大全（セビリア、一五一九年）』、ポルトガル人神学者でのちにバダホス＝エルヴァス会議におけるポルトガル側の裁定者のひとりとして任命されるペドロ・マルガーリョの『自然学摘要（サラマンカ、一五二〇年）』、ポルトガル人航海士アンドレ・ピレシュの手稿『海事書』の三著に共通してとりこまれているものである。そのなかで「最近発見されたばかり」であるとされているフィゲラス港（現バリオス港）は一五〇八―九年のソリスとピンソンの遠征で初めて踏査検分された。したがって、テキストの地理観はエンシソの刊行年より以前に形成されたはずである。経線一度あたり一六レグア三分の二を採用し一周三六〇度で六〇〇〇レグア。既知の世界はフィゲラスから東へ可住世界の東端にあるカティガラまで合計二六一度、四三五〇レグア。大西洋の分界線は「マラニョン〔アマゾン〕川」の河口付近で「インデ

ィアス」と交差する。分界線から東回りでマラッカまで二七七〇レグア。マラッカから二三〇レグアで「ポルトガル国王の領域がおわり、そのはてにガンジェス〔ガンジス〕の河口がある。」[37]

このテキストは対蹠分界を導く東西枠の設定に関してはプトレマイオスのパラダイムに依拠している。一五一一年以降のポルトガル人による踏査検分の成果は取り入れていない。伝統的なプトレマイオス図ではカナリア諸島あたりを通る子午線から東にガンジスのデルタまで一五〇度。したがってカナリア諸島から西の分界線までは三〇度に設定されている。ガンジスとマラッカの位置関係は実際と逆であるが、これはセイロンとスマトラが混同されていたためであろう。たとえば、伝統的なプトレマイオスのアジア観を踏襲したバルトロメ・コロンの地図（一五〇三―〇六年頃）[38]では、メラカ（マラッカ）はガンジスの西、巨大なタプロバナ（セイロンまたはスマトラ）島の東北の対岸に位置づけられている。

Albuquerque & Feijó はこのテキストばかりでなく、ヴァルトゼーミュラーがカヴェリ図（一五〇五年頃）に依拠した南アジア観をプトレマイオスの枠に取り込んで作成した世界図（シュトラスブルク、一五一三年）[39]もまたモルッカ諸島をスペインの分界内に確保していたとみている。そして、新旧二つのプトレマイオスが世界周航後のモルッカ問題をめぐる両国の交渉に影響を与えたという。[40]南アジアについては旧型のプトレマイオス世界図（一五一三年）[41]を、それ以外はヴァルトゼーミュラーによる新版を基準として、そこにテキストの地理観を重ね合わせたのが付図「世界分割概念図Ⅱ」である。

復活したプトレマイオスの世界図とくにヴァルトゼーミュラー版が一六世紀末まで地理学の世界で大きな影響力を行使したことは周知の通りである。しかし、モルッカ問題にこの見方をそのままあてはめることには問題がある。まず、前掲テキストにせよヴァルトゼーミュラー新図にせよ、対蹠分界線とモルッカ諸島の位置関係は明示されていない。テキストにその間接的な手がかりがあるにすぎない。ガンジス河口とマラッカである。ガンジス河口を基準としてプトレマイオスの「大湾（シヌス・マグヌス）」のなかにモルッカ諸島を位置づけるならモルッカ諸島は悠々スペイン圏内である。ただし、これは厳密な位置づけではない。他方、マラッカの位置は付図にみるようにテキストとヴァルトゼーミュラー図とでは大きく異なる。し



世界分割概念図Ⅱ

エンシソ＝ピレシュ＝マルガーリョ（1509—19年頃）の数値を新旧プトレマイオス世界図にあてはめた。〔 〕内はグリニッジ子午線による座標。地図の実線部はヴァルトゼーミュラーによって補正された世界図（1513年）。影のついた破線部は旧型のプトレマイオス世界図（1513年）。ただし，（マラッカ）の位置はバルトロメ・コロン図（1503—6年頃）による。

かも、テキストのマラッカを基準としたうえで経線一度あたり一六レグア三分の二ではなく一七レグア半を採用すると、対蹠分界線はマラッカから東三八〇レグア（経度で二二度弱）のところを通るので、三七〇レグアの起点の選び方によってはモルッカ諸島はきわどくポルトガルの分界内にとどまる可能性が出てくる。この場合厳密に位置関係を算定しようとするなら、マラッカ以東の新しい踏査検分の情報が必要であるが、それはすでにマゼランやレイネル父子らによってスペインに流れている。したがって、世界周航の経度を対蹠分界線とモルッカ諸島の位置付けに関する共和の枠から外すのであれば、プトレマイオスの東西枠ばかりでなく、ポルトガルの踏査検分による新しい地理データもまた共知として機能した可能性を考慮にいれなければならない。この点は知識の問題としてバダホス＝エルヴァス会議における審議の展開のなかで検証したい。

だが、その前に押さえておかなければならないのは、共知の前提である対蹠分界の理念を外交の場で公認することの意味である。両国の航海と地図作成に関わった人々の間でモルッカ諸島はスペインの分界内にとどまるはずだという認識がいわば公然の秘密とみなされるようになったという推測がかりに成り立つとしても、ポルトガル国王にはその認識を政治的に無視する余地が残されていたはずで

ある。別稿で述べたように、ポルトガル国王マヌエルは一五一四年教皇レオ一〇世から得た勅書によってトルデシリャス条約の分界は世界を二等分割するものではなく、両国による「発見」と「先占」の方向を東と西に振り分けたにすぎないことを確認した。[22] しかも、世界周航の時点では両国間に対蹠分界を明記した公文書は存在しない。なぜ対蹠分界は両王権の合意事項になったのか。そして、ポルトガル側はどのような戦略をもって不利にみえる分界の議論に入ったのか。次章ではビクトリア号帰還の時点に立ち戻ってそれ以降の外交の過程のなかでこの問題を考察したい。

(1) João de Barros, *Decadas da Asia*, dec. III, liv. V, cap. VIII (Lisboa, 1946, III, p. 284).

(2) O. H. K. Spate, *The Spanish Lake*, p. 35.

(3) Demetrio Ramos Pérez, "Magallanes en Valladolid: la capitulación", MM, pp. 203–6.

(4) M. Fernandez de Navarrete, ed., *Coleccion de los Viajes que hicieron por mar los Españoles desde fines del siglo XV*, 3vols, BAE, Madrid, 1954, II, pp. 474–77.

(5) J.. A. Robertson, ed., *Magellan's Voyage Around the World by Antonio Pigafetta*, I, Cleveland, 1906, p. 22.

(6) Navarrete, *Coleccion*, II, p. 484.

(7) D. Ramos Pérez, "Magallanes en Valladolid: la capitulacion", pp. 196–97.

(8) 合田「デマルカシオンのモラトリアム」六一—六三頁。

(9) Navarrete, *Coleccion*, II, pp. 519–20.

(10) A. Cortesão, ed., *The Suma Oriental of Tomé Pires & The Book of Francisco Rodrigues*, Hakluyt Society, 1944 (1967), Ixxix-Ixxx, n. 2.

(11) V. M. Godinho, *Os descobrimentos e a economia mundial*, III, Lisboa, 1982, p. 136.

(12) Barros, *Decadas da Asia*, dec. III, liv. V, cap. VI (1946, III, p. 272).

(13) R. de Bulhão Pato, ed., *Cartas de Afonso de Albuquerque*, I, Lisboa, 1884, pp. 64–65.

(14) *Ibid.*, I, p. 68. 一五一二年八月二〇日付の書簡による。

(15) A. Cortesão, ed., "O Livro de Francisco Rodrigues", *The Suma Oriental of Tomé Pires & The Book of Francisco Rodrigues*, pp. 307–322.

(16) A. Cortesão & A. Teixeira da Mota, ed., *Portugaliae Monumenta Cartographica* (以下、PMCと略す)、I, Coimbra, 1958, est. 35, V-X.

(17) PMC, I, pp. 33–34, est. 10; A. Cortesão, *Cartografia e cartógrafos portuguéses dos séculos XV e XVI*, 2vols, Lisboa, 1935, I, pp. 270–72, est. VIII.

(18) PMC, I, pp. 55–61, ests. 16, 20.

(19) *Historia de las Indias por Fray Bartolome de Las Casas*, lib. III. cap. CI (A. M. Carlo, ed., I, México, 1951, p. 175); Antonio de Herrera, *Historia general de los hechos de los castellanos en las islas y Tierra Firme del mar oceáno*, Dec. II, lib. II, cap. XIX

(Madrid, 1726, p. 52).

⑳ Bartolmé Leonardo de Argensola, *Conquista de las Islas Malucas al Rey Felipe III*, Madrid, 1609, p. 16.

㉑ J. Ramos Coelho, ed., *Alguns documentos do Archivo Nacional da Torre do Tombo a cerca das navegações e conquistas portuguézas*. Lisboa, 1892, p. 434. ただし、『マゼラン艦隊航海詳細目（セビリア、一五一八年八月一九日―一九年九月二〇日）』はレイネル父子とリベイロの仕事に言及しておらず、艦隊用の地図作成はエーニミ・ガルシア・デ・トレーニミが行ったとしている。A. Cortesão, *Cartografia e cartógrafos*, I, pp. 253–54.

㉒ PMC, I, pp. 37–38, est. 12 ; A. Cortesão, *Cartografia e cartógrafos*, I, pp. 272–78, est. V.

㉓ Fernão Lopes de Castanheda, *História do Descobrimento e Conquista da Índia pelos Portugueses*, liv. VI, cap. VII (M. L. de Almeida, ed., Porto, 1979, II, p. 163–64).

㉔ Barros, *Decadas da Asia*, dec. III, liv. V, cap. X (1946, III, p. 297).

㉕ R. A. Laguarda Trías, "Las longitudes geográficas de la membranza de Magallanes y del primer viaje de circunnavegación", MM, p. 173.

㉖ Navarrete, *Coleccion*, II, pp. 542–43.

㉗ Robertson, ed., *Magellan's Voyage*, p. 112.

㉘ PMC, I, pp. 35–36, est. 11.

㉙ R. Barreiro-Meiro, "El pacífico y el estrecho de Magallanes en la cartografia del siglo XVI", MM, pp. 522–23.

㉚ Tudela y Bueso, "La especeria de Castilla,", MM, pp. 664–66.

㉛ Castanheda, *História*, liv. VI, cap. XLI (1979, II, p. 218).

㉜ Barros, *Decadas da Asia*, dec. III, liv. V, cap. X (1946, III, p. 297).

㉝ C. R. Boxer, *João de Barros*, New Delhi, 1981, pp. 47–48, 109–110.

㉞ Navarrete, *Coleccion*, II, pp. 644–46.

㉟ S. E. Morison, *The European Discovery of America : The Southern Voyages, 1492–1616*, New York, 1974, p. 470.

㊱ Albuquerque & Feijó, "Os pontos de vista de D. João III", MM. pp. 532–42.

㊲ A. Cortesão, *Cartografia e cartógrafos*' I, pp. 75–80 ; Luis de Albuquerque, ed., *O Livro de Marinharia de André Pires*, Lisboa, 1963, pp. 116–17, 222–23.

㊳ K. Nebenzahl, *Atlas of Columbus and The Great Discoveries*, Chicago, 1990, pp. 38f.

㊴ Carlos Sanz, *Mapas Antiguos del Mundo, Siglos XV-XVI*, Madrid, 1962, N°. 23, 24.

㊵ Albuquerque & Feijó, "Os pontos de vista de D. João III", pp. 534–35.

㊶ C. Sanz, *Mapas Antiguos del Mundo*, N°. 22.

㊷ 合田「ヴァスカンセロスのモラトリアム」、六一頁。

二　ビクトリア号の帰還をめぐって

マゼラン艦隊の生き残りビクトリア号は一五二二年九月六日サンルカル・デ・バラメダ港に帰着した。ポルトガル国王ジョアン三世は同九月末頃、カルロス一世の宮廷にいた公使ルイス・ダ・シルヴェイラ宛の書簡のなかで、スペイン人たちがモルッカ諸島に到達し「そこで丁香を得たことを確認」したと述べている。[1] この書簡でジョアン三世はビクトリア号乗員の拘留とモルッカ諸島から持ちだした丁香その他のあらゆる香料の差し押さえをカルロス一世に対して要求せよとシルヴェイラに命じた。ジョアン三世は抗議の論拠として以下三点を掲げた。第一にカルロス一世の言質。ジョアン三世の父マヌエルはマゼラン艦隊の出帆準備ができたとの報を受けると、ただちにこれに抗議した。これに対してカルロス一世はポルトガル王室のものにはふれないと約束したではないか、と。第二に、トルデシリャス条約によればモルッカ諸島とその近辺の土地は「われわれの分界」に属するものであること。そして第三に、モルッカ諸島は「多年にわたってわが父である国王陛下〔マヌエル〕が占有し交渉」してきたという実績である。[2]

L. de Albuquerque は、この書簡でジョアン三世は初めて対蹠分界の理念を受け入れていることを明らかにした、とみている。[3] だが、第二の論拠でいう分界は必ずしも対蹠分界を意味しない。マヌエルが一五一四年の勅書で確認した「発見」と「先占」による辺境の東漸を示唆するものとみることもできる。同じ書簡の別の一節でジョアン三世は「先占」ないし「占有」重視の立場を明示しているからである。「われわれが長年それを占有しており、そこで平和に交渉している」という事実がありさえすれば、たとえ他の論拠が欠如していようともモルッカ諸島に関する権利主張は有効である、と。[4]

一方、カルロス一世は一五二二年一一月一三日の時点ではラ・コルーニャから第二回のモルッカ諸島遠征隊を派遣する予定であった。そのためにカルロス一世はセビリアの商務院とは別にラ・コルーニャに「香料商務院」を設立して、マゼラン艦隊の出資者クリストバル・デ・アロをその商務員に任命した。[5] ところが、翌一二月にはジョアン三世の抗議におけ

る第二の論拠を逆手にとる形で政治的な調整の途をとる腹を固めた。一五二二年一二月一二日、カルロス一世はモルッカ問題をポルトガル国王と交渉する権限を書記官クリストバル・デ・バロッソに与えた。この信任状に付帯している文書には交渉に向けていくつかの指示が記載されている。そのなかでカルロス一世は、いまだ果たされていないトルデシリャス条約の第三条項すなわち両国王が任命する「天文学者・天地学者・航海士」が集まって線引きを行うという取り決めを遂行しよう。その際に教皇ハドリアヌス六世によって任命された天文学者・天地学者・航海士が乗り込む船を一隻加え、両陣営の仲裁役を委ねよう、と提案した。ただし、トルデシリャス条約には天地学者の参加はうたわれていない。さらに、カルロス一世はトルデシリャス条約の規定にてらして不当に支配されていることが判明した土地はすべてその正当なる所有者に返還することをジョアン三世に請け合い、ジョアン三世にも同様の約束を要求した。[6]

この文書による限り、カルロス一世は対蹠分界がモルッカ諸島を彼の分界内にとどめることを確信していた。ジョアン三世は線引き提案に対する回答を一年近く保留していたが、一五二三年一一月二八日、スペインに派遣していたペドロ・コレイアとジョアン・デ・ファリア宛の書簡において、「分界線の引き方で双方がしかるべき方法を見つけられるように双方の航海士と天文学者と水夫と〔その他の〕人材とが国境にて会合すること」を認めると述べた。[7] この合同委員会の原案はトルデシリャス条約締結の翌一四九五年分界の実施棚上げを記した両国の覚え書きにある。[8] 一五二三年一二月一八日、カルロス一世が駐リスボン大使ファン・デ・スニガにあてた書簡によれば、ジョアン三世の使節は次のように述べた。「〔スペイン国王がモルッカ諸島は〕自らの分界内にあるがゆえにそれを所有する権利をもつと主張するのであれば、〔スペイン国王は〕それを懇請してその〔ポルトガル国王の〕手から受け取らなければならない。〔スペイン国王の〕権限でそれ〔モルッカ諸島〕を占有してはならない。[9]」この書簡は一年ほどの間に対蹠分界の理念が両国王間の暗黙の合意事項となっていたことを示唆している。以後、両国の交渉は進展し翌一五二四年二月一九日ビトリアで合同委員会の開催に関する協約が締結された。

まず、両陣営はそれぞれ三名の天文学者と三名の航海者を任命する。彼らは分界によってモルッカ諸島の「所有」権の

所在を裁定する。同様に両陣営はそれぞれ三名の法曹家を任命する。彼らはモルッカ諸島の占有に関する調査を行い、提示される文書や証言を受領して占有問題に裁定を下す。三月末までにバダホス＝エルヴァス間に集まり五月末までに結審する。審議中は両陣営はモルッカ諸島に遠征隊を派遣できない。分界によって所有の問題が解決する場合は、占有の問題は裁定がなされたものとして理解する。分界による所有の問題が裁定できない場合は、本協約以前と同じ条件下にとどまる、と。[10]

こうして合同委員会の開催は最終的な合意に達した。なぜ両国は遠征の一時中断という高い代価を払ってまでこの合意を必要としたのであろうか。元来この会議はトルデシリャス条約の延長線上にあり、同条約は教皇分界を乗り越える形をとっていた。ただし、それは両王権に下賜された分界に関わる教皇勅書の権威を大前提として互いに認めあったうえでの部分修正にすぎなかった。その意味で教皇勅書の恩恵に与れなかったあるいはその権威を認めない第三国にとって、両国の分界論は国際法上の基盤を持たない空論に等しい。それゆえ、会議はこの第三国に対する「世界分割」のパフォーマンスとしての側面を持たされたはずである。一六世紀前半において両国が意識しなければならなかったのはイギリスよりもむしろフランスであった。すでに一六世紀初頭からフランス人たちはブラジル沿岸に出没してポルトガル人たちとの間に緊張関係を作り出していたが、ビクトリア号帰還を契機にフランソワ一世はアジアへの航路開設に積極的な態度をとるようになった。その嚆矢となったのが一五二三―二四年のヴェラツァーノによる北米の探検航海である。[11] この動きはスペイン・ポルトガル両王権を刺激し共通の敵の存在を意識させたにちがいない。

以上の点は両王権を合意に至らしめる政治的要因のひとつとして考慮に入れなければならない。ただし、合同委員会開催の直接的な決め手となったのは対蹠分界の理念をジョアン三世がある期間をおいたのちに事実上容認したことにある。なぜポルトガル国王は対蹠分界の理念を受け入れ合同委員会の開催を認めたのであろうか。

ビトリア協約を一見して目につくのは、分界による「所有」の裁定と法曹家による「占有」の裁定を分離して行うとい

う原則が盛り込まれたことである。Albuquerque & Feijó は、ジョアン三世はいずれの裁定にも見通しを得たからこそ交渉に前向きな態度をとれるようになったのだ、と考えている。Albuquerque & Feijó は先に引用した一一月二八日の書簡でジョアン三世が合同委員会の開催を認めるのは「モルッカ諸島占有の根拠は確実であり、その証明を懸念することはないからである」[12]と述べている点に注目し、この「モルッカ諸島占有の根拠」として回答保留中の一五二三年八月頃にポルトガルで作成されたモルッカ問題の「調書」を持ち出している。[13] ジョアン三世はポルトガル領インドがモルッカ諸島とかかわってきた歴史を確定するため関係者九名から供述を引き出すよう命じたのである。この「調書」は質問の設定と供述の内容のうえで以下三点を強調している。

第一に、モルッカ諸島の国王が「自発的に」臣下としてポルトガル国王に服従したこと。第二に、ポルトガル国王はモルッカ諸島との貿易を「独占」しているということ。ここでいう「独占」とはマラッカを起点とするモルッカ諸島との交易はポルトガル人であれ現地人であれマラッカ長官の許可のもとに行われるということである。第三に、以上二点を踏まえて、ポルトガル領インドとモルッカ諸島はマゼラン艦隊の到来以前におよそ一〇年間の交渉の歴史をもつということである。[14]

Albuquerque & Feijó は、この「調書」によってジョアン三世はモルッカ諸島を占有していることを容易に立証できるようになった、とみている。[15] だが、この見方には問題がある。注意を要するのは「調書」の内容は占有の実態を正確に踏まえたものではないということだ。「調書」はモルッカ諸島全域の占有権を示そうとしているが、丁香貿易の王室独占体制は成立していないし、ポルトガル国王の宗主権を認めたのはモルッカ五島のうちテルナテ島の国王にすぎない。しかも、テルナテ国王と敵対関係にあったティドーレ島の国王はマゼラン艦隊の寄港（一五二一年一一月）に際してスペイン国王の宗主権と商館の建設を認めた。これに先立って、ポルトガル国王マヌエルは一五二〇年四月、前マラッカ長官のジョルジェ・デ・ブリトにマゼラン艦隊を殲滅しテルナテに要塞を建設せよという密命を授け六隻の艦隊でリスボンから送りだ

した。この艦隊がテルナテ島に到達するのは一五二二年五月。同年六月ポルトガル人たちは要塞の建設に着手した。[16] ポルトガルはこれ以後モルッカ諸島の実質的占有を狙うが、「調書」はブリト艦隊のテルナテ島到達を確認していない。[17] したがって、ジョアン三世が対蹠分界の理念と合同委員会の開催を認めたのは、占有権の主張に自信をえたからではなく、占有の実態に危機感を抱いていたからであり、要塞を中心に実質的な占有を確保し「調書」とのズレが解消されるまでスペイン側の遠征事業を凍結しようとしたからであろう。その意味で審議中はモルッカ諸島に遠征隊を派遣できないというビトリア協約の規定はジョアン三世が合同委員会の開催を認める条件として要求した可能性が強い。

もっとも、ジョアン三世にとって占有の問題以上に気がかりであったのはカルロス一世が自信を見せつけた分界による所有の裁定の行方であったにちがいない。Albuquerque & Feijó は、経度測定が誤差を含みやすいことは周知の事実であったからジョアン三世は分界による所有の裁定は困難でありモルッカ諸島占有の非合法性は立証できないという見通しをもてた、と推測している。[18] だが、後述のようにポルトガル側はモルッカ諸島と対蹠分界線の位置関係を明示するふたつの数量的情報を持っていた。そのうちのひとつはポルトガルに不利なものである。これが共知になれば分界による所有の裁定は充分可能でありモルッカ諸島の占有は非合法化されてしまう。ジョアン三世は分界による所有の裁定が決して不可能でないことを認識していたはずである。だからこそジョアン三世はビトリア協約の前から会議の直前まで審議の展開に歯止めをかけるためさまざまな方策を凝らしたのだ。

その方策の一環としてジョアン三世はカルロス一世が当初から要求していた天地学者の参加を阻もうとした。一五二四年一月三一日コレイアとファリアは、ジョアン三世宛の書簡で次のように報告している。「天文学者はともかく天地学者たちの交渉」に巻き込まれてはならない。問題は地理や地誌にあるのではなく、分界の方法にある。それは「海と空と針路と方位と度数とによって」なされるべきで、これは「天文学者と航海士」の仕事である、と。[19] さらに、ジョアン三世はポルトガル側の法曹家たちに与えた三月二五日付の書簡のなかで、カルロス一世が分界の裁定者として派遣したマゼラン艦

隊の航海士エステヴァン・ゴメスやポルトガル領インドの航海者シマン・デ・アルカソヴァ、地図作成家のディオゴ・リベイロらポルトガル人の登用を阻止するよう指示している。[21] 一五一一年以降の踏査検分の成果がスペインに流入しそれが審議の展開に影響する事態をジョアン三世がおそれていたことは明らかだ。結果的に天地学者の排除というジョアン三世の言い分は通ったし、登用阻止を名指された三名は会議前と会議の冒頭に裁定者からはずされた。

ただし、天地学者であれ地図作成家であれ、裁定者たちを補佐する技術顧門として間接的に会議に参加することにまで干渉する術はない。そこで、ジョアン三世は別の戦略をとった。ジョアン三世は法曹家たちに一五二四年三月二四日、長大な指示書[23]を与え、分界の方法を月食による経度測定に限定せよと命じた。その狙いは分界による所有の審議を空回りさせることにあった。Albuquerque & Feijó も認めるように、[24] 月食による経度測定は時間がかかるばかりか、さまざまな観測から一致した結果を引き出すことは困難であったからである。さらに指示書において注目すべきは次の点である。すなわち、所有と占有は別問題であるが、「所有と分界の方法」は代表者全員で議論する。法曹家と代理人がいない場合は、天文学者と航海者は結論を下せない、と。[25] つまり、ジョアン三世は分界の方法を限定したばかりでなく、分界を裁定する天文学者と航海者の権限を相対的に弱めて分界論の展開に法曹家を通じて統御を利かせようとしたのである。

以上のように、この会議が秘めていたという「偉大な科学的事業となる可能性（Lamb）」は会議の構成とポルトガル国王の思惑によってあらかじめその芽生えに歯止めがかけられていた。次章では仕掛けられた歯止めの働きと分界に関する共知の構造に注目しながら二つの審議の過程を追う。

① Centro de Estudos Históricos Ultramarinos, *As Gavetas da Torre do Tombo*（以下、*Gavetas* と略す）, IV, Lisboa, 1964., p. 78.
② *Gavetas*, IV, pp. 78–80.
③ Luís de Albuquerque, *O Tratado de Tordesilhas e as dificaldades técnicas da su a aprieação rigorosa*, Coimbra, 1973, p. 12.
④ *Gavetas*, IV, p. 79.
⑤ Juan Gil, *Mitos y utopias del Descubrimiento, 2: El Pacifico*, Madrid, 1989, pp. 23f.
⑥ *Gavetas*, VIII, Lisboa, 1970, pp. 256–57.
⑦ *Ibid.*, p. 171.

⑧ 合田「デマルカシオンのモラトリアム」、五六頁。
⑨ Navarrete, *Coleccion*, II, pp. 597.
⑩ *Ibid.*, pp. 602–606; *Gavetas*, VIII, pp. 595–603.
⑪ S. E. Morison, *The European Discovery of America: The Northern Voyages, 500–1600*, N. Y., 1971, pp. 252–325; *The Southern Voyages, 1492–1616*. pp. 585–38.
⑫ *Gavetas*, , VIII, p. 171.
⑬ Albuquerque & Feijó, "Os pontos de vista de D. João III", pp. 536–39.
⑭ *Gavetas*, III, Lisboa, 1963, pp. 17–39.
⑮ Albuquerque & Feijó, *op.* cit., p. 539.
⑯ Godinho, *Os descobrimentos e a economia mundial*, III, pp. 139–41.
⑰ テルナテ島からアントニオ・デ・ブリトの詳報が発せられたのは一五二三年二月一一日（Gavetas, VIII, pp. 632–45）。D. Lach は、この書簡が一五二四年初頭にリスボンに届きその内容がピガフェッタの報告を裏づけるものであったことからジョアン三世は交渉に傾いた、と考えている（D. F. Lach, *Asia in the making of Europe*, I-1, Chicago & London, 1965, pp. 176–77）が、当時の航海ではリスボン着は最速でも二四年六月である。
⑱ Albuquerque & Feijó, *op. cit.*, p. 539.
⑲ *Gavetas*, IV, pp. 313–16.
⑳ *Gavetas*, VIII, pp. 512.
㉑ *Gavetas*, VIII, pp. 617–22.
㉒ Albuquerque & Feijó, *op. cit.*, pp. 541–42.
㉓ *Gavetas*, VIII, p. 622.

三　バダホス＝エルヴァス会議

一五二四年四月一一日、国境を流れるカイア川の橋のうえで合同委員会のメンバーが全員顔を合わせた。以後会合はバダホスまたはエルヴァスで開かれる。分界による所有の裁定者として任命された「天文学者と航海者」は、スペイン側から階梯順に、エルナンド・コロン、シマン・デ・アルカソヴァ、神学者サンチョ・デ・サラヤ、神父トマス・ドゥラン（エステヴァン・ゴメスに代わって任命）、ペロ・ルイス・デ・ビリェガス、ファン・セバスチャン・デル・カノの六名、それにポルトガル側から、王室会議のディエゴ・ロペス・デ・セケイラ（元インド総督）、ペドロ・アフォンソ・デ・アギアール、神学者フランシスコ・デ・メロ、国王侍医トマス・デ・トレス、シマン・フェルナンデス、航海士ベルナルド・ペレスの六名で計一二名。占有の裁定者に任命された「法曹家」はスペイン側から王室会議のクリストバル・バスケス・デ・アク

ーニャ、バリャドリド大審院（チャンシリェリア）のペドロ・マヌエル、騎士修道会会議（コンセホ・デ・オルデネス）のフェルナンド・デ・バリエントスの三名と、ポルトガル側からいずれも宮廷控訴院（デゼンバルゴ・ド・パソ）のアントニオ・アゼヴェド・コウティーニョ、フランシスコ・カルドゾ、ガスパル・ヴァスの三名で計六名。以上二群一八名の裁定者団の他にカルロス一世の弁護人としてファン・ロドリゲス・デ・ピサ、代理人としてベルナルディノ・デ・リベラが、ジョアン三世の代理人としてアフォンソ・フェルナンデスとディエゴ・バラダスが加わった。以上二二名に書記官二名の計二四名が会議の全構成員である。[1] 分界による所有の審議と占有の審議は平行して行われた。まず占有の審議の過程をあとづけておこう。

1 占有の審議

モルッカ諸島の占有に関する審議の展開はひとことで言って消耗を感じさせる実りのないものであった。会議の冒頭、裁定者たちは両陣営の代理人たちに対して裁定のための申し立てを行うように命じたが、どちらも原告になることを嫌いそれを相手に押しつけようとした。スペイン側は次のように述べた。会合はポルトガル国王の要請で開催された。カルロス一世の命じた行為で損害を被ったと言うのであれば、ポルトガル側はその損害の在処を明らかにしなければならない、と。[2] しかし、ポルトガル側は四月一四日にきりかえした。ポルトガル国王は「一〇年間以上」モルッカ諸島を占有してきた。この占有を不当とみなすのであれば、スペイン側はその旨の訴状を提出しなければならない、と。[3] このような押し問答が続いたのち、四月二二日にポルトガルの法曹家三名は調停案を提示した。両国間にはモルッカ諸島の占有をめぐって認識の相違があり、両国の代理人はいずれも訴状を提出する気がないのだから、両国の代理人たちは「証人たちに尋問する際の拠り所とする法的諸条項」を作成しなければならない、と。[4] ポルトガル側がモルッカ問題の「調書」と国境に派遣していた証人たちの活用を考えていたことは明らかであるが、スペイン側は申し立てもせずに立証するなど論外であるとして頑強に抵抗した。時間はいたずらに費やされた。[5] ポルトガル側は会期延長を提案したが、これも拒否された。[6] 五月三

一日スペインの法曹家たちは会場に姿を見せなかった。こうして占有の審議は終了した。[7]

両国の法曹家たちはなぜ申し立てを拒否したのであろうか。申し立てに必要なのは、両国間のあるいはモルッカ諸島の主権者との法的な取り決めをどちらかが犯したという事実である。両国間の取り決めとしてはトルデシリャス条約における分界の規定以外に存在しないのだから、分界による所有の裁定結果に基づいて占有問題の申し立てを行わなければならない。ところが、ビトリア協約の規定上分界による所有の裁定がくだされた時点で占有の審議は解消される。したがって分界の規定による申し立ては事実上成立しえない。

そこで残るはモルッカ諸島の主権者との法的な取り決めである。事前の準備といいマゼラン艦隊到来に先立つ約一〇年間の交渉の実績といい、この点での申し立てはポルトガルに有利にみえる。先占の競争についてもその調査についてもスペイン側の出遅れは否めない。ビクトリア号乗員一六名の証言が採取されたのは会期も終わりに近づいた五月二三日のことである。[8]だが、問題はモルッカ諸島に統一的権力が存在しなかったことにある。モルッカ諸島の覇権を求めて争うテルナテとティドーレ。それぞれにポルトガルとスペインが加担して軋轢は拡大していた。したがってポルトガル側がテルナテとの関係を根拠に申し立ててもスペイン側はティドーレとの関係を根拠に容易にそれを論破できる。その逆も同様だ。だからこそいずれも後手をとろうとしたのである。

占有の審議は両者痛みわけで終わった。ポルトガルは一〇年の実績を活かせなかったが、時間かせぎという最低限の仕事をはたした。スペインは準備不足であったがポルトガルの「調書」と証人を抑え込むことができた。両者の主たる関心はあくまでも対蹠分界をめぐる攻防にあった。

2　分界による所有の審議

分界による所有の審議は冒頭から裁定者の人選で紛糾した。初日ポルトガルの代理人はアルカソヴァはポルトガル国王

の務めを全うせずに出国したのだから裁定者として不適切であると述べた。スペインの裁定者たちは審議の遅延を意図した申し立てであると抗議したが、四月二〇日バダホスの会合で妥協が成立した。スペイン側はアルカソヴァを解任して新たにアントニオ・アルカラスを任命、ポルトガル側もベルナルド・ペレス（一五二四年二月にカルロス一世からジョアン三世へ忠誠を変えた西インド航路の航海士）を解任して代わりにペドロ・マルガーリョを任命した。[9] ただし、マルガーリョはポルトガル側に不利な地理観を表明していた。このことは後にスペイン側の攻撃材料のひとつになる。

四月二三日、両国の代理人たちは、ヴェルデ岬諸島をどう位置づけるのか、そのどの島から三七〇レグアを算定するのか、そしてだれが分界を実施するのか、以上三点を議論の端緒として提起した。[10] スペインの裁定者たちは五月一三日バダホスの会合で、三七〇レグアの算定はヴェルデ岬諸島の西端に位置するサン・アントニオ島から始めなければならない、と主張した。ポルトガルの裁定者たちは一三日から一八日にかけていささか苦しい反論を試みた。トルデシリャス条約ではたんにヴェルデ岬諸島から算定するとされているにすぎない。これは同一子午線上に複数の島々が並ぶ場合を想定しそこから算定するということだ。このことは同諸島の東端で南北に並ぶサル島とボア・ヴィスタ島の場合に生じる。ゆえに三七〇レグアはサル島とボア・ヴィスタ島から算定しなければならない、と。[11]

これに対してスペインの裁定者たちは五月一八日、三七〇レグア算定の起点に関する争いから先に進むのが賢明である。地球儀に海と陸とを位置づけよう、と提言した。五月二三日、スペインの裁定者たちはまず地図をエルヴァスの会場に持ってきた。モルッカ諸島は赤道をはさんでその両側に広がり、分界線から西へ一五〇度のところにある。彼らはこの地図をポルトガルの裁定者たちにわたしてその検討を促し、代わりに東回りの海図を提示するよう要請した。[12] ポルトガルの裁定者たちは次のように論駁した。スペイン側の地図ではヴェルデ岬諸島やその他多くの土地が記載されていないから三七〇レグア算定の起点を確定できない。スペインの裁定者たちはファン・セバスチャン・デル・カノ船長の航海がその根拠であるというが、それだけでは不十分である。われわれが提出する地図ではモルッカ諸島はサル島とボア・ヴィスタ島から

東へ一三四度の距離にある、と。[13]

五月二八日、両陣営から地球儀が提出された。サル島とボア・ヴィスタ島から東回りでモルッカ諸島の中心までの経度はポルトガルのものでは一三七度、スペインのだと一八三度になる。[14] 実に四六度もの経度差であった。

五月三〇日、再び国境の橋の上。ポルトガルの裁定者フランシスコ・デ・メロは地球儀の検討では意見の一致を見ないのだから経度を確実に把握する方法が必要であると述べ、月と恒星の距離や月食などを活用する四つの天文学的方法を提示した。さらに、メロはこの方法を検討するために会期の延長を要求すると述べた。[15] これに対してスペインの裁定者エルナンド・コロンは以下の文書を読み上げた。

ポルトガルの裁定者たちのごまかしは明らかだ。彼らの発言と地球儀はサル島の子午線から東回りでモルッカ諸島までの距離について相違がある。一三七度や一三四度さらに一三三度のものもある。この差異は虚偽を証明するものだ。真実はわが方にある。距離は一八三度、西回りで一七七度である。基本的な論点は会期中に決められる。多大な時間を要する方法の提起は遅延を意図していることを示す。〔四つの天文学的方法は〕最終日に分界と所有に関してキャスティングボートをにぎるために提起したにちがいない、と。[16]

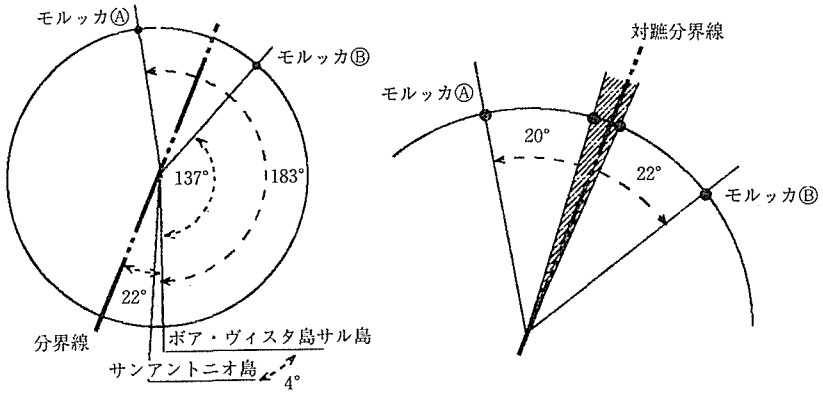
五月三一日にポルトガルの裁定者たちは書面で応答した。分界について明確な裁定を下せる状態からはほど遠い。われわれの地球儀〔が示す数値〕にばらつきがあるからといって何が立証されるわけでもない。セバスチャン・デル・カノの航海のみに基づいた地球儀と地図にも差異がある。あらゆる地球儀と地図は誤りを含むものであると信じるがゆえに、われわれはいくつかの天文学的方法を提示するのだ、と。[17]

これに対してエルナンド・コロンはスペイン裁定者団の統一見解を読み上げた。きわめて長大であるが以下重要な個所を抜粋する。

ポルトガル国王の代表たちがサル島の子午線からモルッカ諸島までにあるという距離とわれわれが西回りで同じくモル

ッカ諸島までにあるとする距離とをあわせると地球の一周三六〇度になるはずであるが、実際には五〇度近く不足している。彼らが示したものよりも東回りの距離が大きいからにちがいない。その根拠は以下の通りである。まず裁定の引き延ばしをはかり結論に手をかけようとしないこと。彼らはシモン・デ・アルカサバ〔アルカソヴァ〕を忌避した。それは彼があの〔東インディアスの〕海でポルトガル人たちと航海し実際の距離とその距離がどこで短縮されているのかを知っているからである。度数が低減されてきたということは、紅海から東方までの土地と海を漫遊し航海した人々の記録やマルコ・パウロ〔ポーロ〕とフアン・デ・マンデヴィラ〔マンデヴィル〕の航海や漫遊から明らかだ。ポルトガル人たちでさえモルッカ諸島はスペイン国王の分界内に入っていると認めている。ポルトガルの裁定者のひとりマルガーリョはそのことを立証した。モルッカ諸島がスペイン艦隊によって発見された時、ポルトガル国王はそれらの位置と状態について通知するよう要請したので、おおいに究明された。そのために集合を命ぜられた人々は一致して、モルッカ諸島はスペインの分界にあると結論を下した。それまでも国外への海図の持ち出しは厳重に禁止されていたが、その時ははるかに大きい熱意が注がれた。多くの地図は焼却されたり没収されたりした。そして、すべての地図において航程の短縮が命ぜられた。ポルトガルでは国外に地図を持ち出させないよう警戒されていたが、それでも持ち出しに成功した人々もいた。航海士や航海の方法、海図・地球儀・世界図の作成に経験のある人々は、経度はポルトガル国王陛下の代表者たちが地球儀と地図で主張したのよりもはるかに大きいと述べた。今日ほど短縮の疑いのない時分にポルトガルで作られた地図で調べて平面と球面の相違に注意しながら幾何学的方法で処理すると、マラッカはサン・アントニオ島の東一六一度。マラッカからモルッカ諸島までは二三度。したがって、サン・アントニオ島から東回りでモルッカ諸島までは一八四度。これにサン・アントニオ島から三七〇レグアの分界線までの経度〔約二二度〕を付加しなければならない〔付図「世界分割概念図Ⅲ（左）」参照〕[18]。

このスペイン側の統一見解に対してポルトガル側は天文学的経度測定の提案に固執した。こうして分界による所有の審議は終了した[19]。



世界分割概念図Ⅲ（バダホス＝エルヴァス会議）
（左）スペイン側Ⓐとポルトガル側Ⓑの位置づけ（5月28日）
（右）深層の共知（斜線部分）に照らした両陣営の経度改竄

以上のように、分界による所有の審議がデータのすり合わせという点で実質的に進展を見せたのは五月二三日以降の一週間ほどにすぎない。それをまとめると次のようになろう。両国からそれぞれ東回りで相互補完的に世界地理に関する情報が提示されるが、経度のズレが大きい。算定の起点もちがう。そこでスペイン側が起点と方向をポルトガル側に合わせるが、事態は変わらない。両者決め手を欠いて膠着状態になったところでポルトガル側は天文学的方法の提唱によって局面の打開をはかった。この提案はスペイン側を刺激しポルトガル側のデータ改竄行為を「暴露」させた。すなわち、ポルトガルでは前述の占有問題の「調書」以外に対蹠分界に関する調査がなされたが、ポルトガルに不利な結論が出されたため「航程の短縮」による地図の偽造が行われた、というのだ。この暴露をそのまま受け取るならば、スペイン側はポルトガル側の改竄されていないデータを分界の共知に据えようとはかりポルトガル側はそれを阻止しようとした、ということになる。

しかしながら、「暴露」の図式はそれほど単純ではない。この点で注目したいのは、審議のさなかにポルトガルの裁定者セケイラ、アギアール、メロの三名が国王に宛てた書簡（一五二四年五月一八日）の次の一節である。すなわち、三七〇レグア算定の起点をヴェルデ岬諸島の東端に位置するサル島とボア・ヴィスタ島に定めると海図上モルッカ諸島は一二ないし一三

レグアほどポルトガルの分界内に入るが、ヴェルデ岬諸島西端のサン・アントニオ島から算定するとモルッカ諸島はスペインの分界に五〇レグア入ったところに位置づけられる、と。[20]

この一節はポルトガルの裁定者たちが五月一三日以降懸命に起点をサル島とボア・ヴィスタ島に定めようと働きかけた理由を明瞭に示している。しかし、本稿にとって重要なのは、そこに示された数値が分界に関する共和の構造を解き明かすカギとなっていることである。後者の五〇レグアは経度で三度弱に相当する。これはマゼラン覚え書のいう二度半から四度の間という数値にきわめて近い。また、前者の一二ないし一三レグアすなわち経度で一度弱という数値に近いものを示しているのは、スペインから帰国したペドロ・レイネルによって一五二一年末ないし二二年、ビクトリア号帰還の少し前に作成されたとされる南半球の投影図である。この図では対蹠分界線はモルッカ諸島のわずか二分の一度東で赤道と交わっている。[21] したがって、五月一八日付書簡が示す数値はマゼランないしレイネル父子によってスペインに流された情報と同一であり対蹠分界線とモルッカ諸島の位置づけに関する共知の核になった可能性が強いのである。

とすると、Albuquerque & Feijó が指摘した新旧プトレマイオスの東西枠は共知として機能しなかったのか。結論を先取りしていうと、それは表層の共知にすぎなかったのだ。むろん、スペイン側が有利と思しき学的権威の活用を考えないはずはない。事実、審議が停滞中の四月一五日、会議の舞台裏でスペインの裁定者トマス・ドゥランは技術顧問のセバスチャン・カボートおよびフアン・ベスプッチと連名で同僚に次のような見解を提示した。

一度あたりのレグア数が少ないほどにスペイン国王に有利である。しかし、両国の「航海者たちが共用している」一度あたり一七レグア半を採ろう。三七〇レグア算定の起点はサン・アントニオ島とする。その緯度だと三七〇レグアは約二二度。ヴェルデ岬から分界線までは三二度となる。トルデシリャス条約で海洋の分割が発令された時「東方における分割」も定められた。プトレマイオスによるとカナリア諸島からカティガラ岬までは一八〇度。西の分界線からヴェルデ岬までの三二度を差し引くと、東方の分界線はカナリア諸島から東へ一五〇度のところにあるガンジス河口を切る。したがって、

〔ガンジス川より東にある〕マラッカ、スマトラ、モルッカ諸島はスペイン国王の分界内にある、と。[22]

エンシソ＝ピレシュ＝マルガーリョの地理観とちがってマラッカは正しくガンジスより東に移動させられている。ただし、対蹠分界線の位置づけの基準はマラッカからの東西距離ではなくあくまでもガンジス河口である。したがって、ポルトガル側と折り合いをつけるために一度あたり一七レグア半を採用していながら、一六レグア三分の二型をとるエンシソ＝ピレシュ＝マルガーリョの地理観と同じくプトレマイオスの権威を頼りに対蹠分界線をガンジス河口に位置づけているのだ。ドゥランらの見解にはマルガーリョを含むポルトガルの裁定者たちにプトレマイオスの東西枠を共知として認知させようという戦略が読みとれる。最終日のスペイン側の統一見解でもプトレマイオスの東西枠は幾度か引用された。[23] ポルトガル側も審議を通じてプトレマイオスの権威に挑戦することはなかった。

しかしながら、プトレマイオスの東西枠だけではモルッカ諸島と対蹠分界線を厳密に位置づけることは不可能である。それは共知の表層にとどまらざるをえない。マルガーリョを登用するというポルトガル側の一見不可解な人事はこの点を見きわめたうえでのことであったかもしれない。事実、五月二三日以降の審議の展開に実質的な影響を与え最終日の暴露を誘発したのはポルトガルで算出されていたと思しきモルッカ諸島の数量的な位置づけであった。これが分界に関するもうひとつの隠された深層の共知であった。

深層の共知を基準として考えると、五月二八日に提出されたポルトガルの地球儀は東回りでモルッカ諸島までの距離をおよそ二二―二六度もポルトガル有利に歪曲している。しかし、同時に提出されたスペインの地球儀も逆におよそ二〇―二四度スペイン有利に歪曲した数値を示している。この数値はピガフェッタのものよりさらに一―五度ほど歪曲の幅が大きい。したがって、スペイン側もポルトガル側とほぼ同等の改竄作為を労していたことになる。両陣営は深層の共知を間において睨み合い両側から綱引きをしている格好なのである〔「世界分割概念図Ⅲ(右)」参照〕。

しかし、深層の共知はなぜ隠され歪曲されなければならなかったのか。ポルトガル側が不利な情報を機密事項にしたい

のは頷けるが、スペイン側が対蹠分界線の東五〇レグアというモルッカ諸島の位置づけをそのまま掲げないのはなぜか。その重要な理由として推測しておきたいのは、モルッカ諸島のみならずその西に広がる豊かな島嶼部と香料貿易の要衝マラッカまでもスペイン圏内に確保したいという欲求である。スペイン側はマラッカとモルッカ諸島の経度差を二三度と見積もっていたが、歪曲の幅はほぼそれに相当する。

以上の考察から小括すると、「偉大な科学的事業となる可能性」に対して仕掛けられた歯止めはほぼポルトガル側の思惑通りに働いたといえよう。スペイン側が対蹠分界線を確定するために会議で展開した戦略は充分な成果をあげたとはいえない。「暴露」は最後の切り札であったが、かえって自前の論拠が弱いことを露呈することになった。スペイン側はアンドレス＝アルボによる世界周航の経度を黙殺しピガフェッタの記録を残したが、前者がポルトガル側に渡った可能性がある以上、後者を強く押し出すこともできなかった。だからこそ、マルコ・ポーロやマンデヴィルといった時代遅れの典拠まで持ち出さざるをえなかったのだ。スペイン側はこのような苦しい展開を全く予想しなかったのであろうか。

審議をなし崩して終わらせるためのシナリオの存在をスペイン側が事前に察知していたかどうかは不明である。しかし、スペイン国王は審議がなし崩しで終わるかもしれないという危惧を抱きながら会議を成立させるためにあえてそれを飲み込んでいたのではないか。このような疑問をもたざるをえない理由は、スペインの裁定者団のなかでエルナンド・コロンだけがもっていた分界論が日の目を見ることなく葬りさられたことにある。

3　エルナンド・コロンの分界論

エルナンドの分界論は二つの部分からなる。第一の部分は分界の方法に関する強い懐疑を示している。エルナンドは分界の裁定者として第一位にあったが、彼とその他の裁定者たちの間にはもともと分界の見方に食い違いがあった。会議の冒頭、人事問題で実質的な分界の審議が滞っている間にスペイン側はバダホスで意見の調整をはかろうとしていた。前述

のように裁定者ドゥランらはプトレマイオスの東西枠を共知として押し出す戦略を提示したが、エルナンドはその二日前の四月一三日同僚の前で次のような見解を開陳した。

分界には陸と海の測量による方法と天文学的な経度算出法とがある。前者は困難であるばかりか不確実である。後者はそれよりもすぐれた方法であるが、実行は難しい。しかも、その前提となる一度あたりの距離のとりかたには異説が多い。したがって「だれも強弁するつもりの者を説き伏せることはできない。現状では裁定はくだせない。」[24]

これは分界の審議のゆくえをきわめて正しく展望した発言である。両陣営が分界の方法とデータを持ち寄りそれらをつきあわせても審議がすれちがいに終始することは避け難いとエルナンドは見通していたのだ。

エルナンドの見解の第二の部分は会議の存立に係わる重要な点をついている。それは両王権の合意事項でありドゥランらが前提としている対蹠分界の理念を否定するものであった。そのことを明言するのは四月二七日スペイン側の法曹家三名に提出した覚え書においてである。エルナンドは次のように述べている。

トルデシリャス条約の分界に関して「人々は確かな情報と認識をもっていなかったので、両国王間で世界が〔二等〕分割されたのだという風評があらゆるところに広まってしまった。」この風評は分界と所有の問題でスペイン国王が意見を求めた人々にも「非常に深い印象を与えた。〔そのため彼らは〕実際にそうなのだと確信するに至った。」だが、トルデシリャス条約はそのような読み方はできない。二等分割の解釈を認めると、「著しく遅滞しているこの交渉において不適切な手段へと導くことになる。しかも、ポルトガル人との軋轢はいうにおよばず仲間内の軋轢にもつながるのだ」、と。[25]

結局、エルナンドの二つの見解はいずれも会議の表舞台に出ない。これはどのように理解するべきであろうか。前述のように二等分割というトルデシリャス条約の解釈は辺境の東漸・西漸というテキストの本義から逸脱するのだから、エルナンドがその解釈を批判したのは理にかなっている。しかし、バダホス＝エルヴァス会議が存立しえたのは両王権が対蹠分界の理念をいわば政治的共知として認めあったからである。その意味で対蹠分界の理念の否定は両王権とくにスペイン

国王にとって外交上の積み上げを無に帰する極論であった。スペイン国王にとってこの極論を禁圧するということは、政治的共和を尊重するということであり、かつ西回り航路による遠征隊の継続的派遣でモルッカ諸島の「占有」をもぎ取る方途を一時的にせよ断念し対蹠分界の裁定に賭けるということである。ところが、肝心の裁定が無理だと主席裁定者はいう。エルナンドの見解の大筋さえ知ることなく彼を裁定者の第一位に任じるはずはあるまい。したがって、当初スペイン国王は分界による所有の裁定に自信を漲らせていたが、ある時点からその審議が決め手を欠いたままなし崩しで終わるのではないかという危惧を抱くようになり、それが解消されぬまま審議に突入した、という推測が成り立つ。結果的にスペイン国王は政治的共知を貫いたのである。

① Navarrete, *Coleccion*, II, p. 628; *Gaveias*, III, pp. 514–15.
② *Gaveias*, III, p. 533.
③ *Ibid.*, p. 534.
④ *Ibid.*, pp. 538–39.
⑤ *Ibid.*, pp. 559ff.
⑥ *Ibid.*, pp. 560–61, 572.
⑦ *Ibid.*, pp. 572-73.
⑧ Navarrete, *Coleccion*, II, pp. 633–34.
⑨ *Ibid.*, pp. 628–29.
⑩ *Ibid.*, p. 629.
⑪ *Ibid.*, pp. 629–30.
⑫ *Ibid.*, pp. 630–31.
⑬ *Ibid.*, p. 631.
⑭ *Ibid.*, p. 632.
⑮ *Ibid.*, p. 632.
⑯ *Ibid.*, pp. 632–33.
⑰ *Ibid.*, p. 633.
⑱ *Ibid.*, p. 617–25.
⑲ *Ibid.*, p. 633.
⑳ *Gaveias*, IV, p. 312.
㉑ PMC, I, pp. 39–41, est. 13.
㉒ Navarrete, *Coleccion*, II, pp. 614–16.
㉓ *Ibid.*, pp. 623–33.
㉔ *Ibid.*, pp. 611–14.
㉕ *Ibid.*, pp. 616–17.

おわりに

モルッカ問題の収束についてはごく簡単にふれるにとどめたい。バダホス＝エルヴァス会議以後もモルッカ問題に関する両国の交渉は断続的に行われていたが、一五二五年七月二四日、カルロス一世はガルシア・デ・ロアイサを総司令官とする七隻の第二次モルッカ遠征隊をラ・コルーニャから送り出した。さらに、この遠征の成果とモルッカ諸島でビクトリア号と別れたトリニダード号の消息を探る名目で一五二七年一〇月三一日、ヌエバ・エスパニャの太平洋岸からアルバロ・デ・サーベドラ・セロン率いる三隻の艦隊が派遣された。[1] この動きはモルッカ諸島のポルトガル人に脅威を与えた。ポルトガルは一五二二年テルナテ島に要塞を建設し丁香貿易の王室独占を狙い始めたが、一五二六年から二九年にかけてモルッカ諸島全体ではむしろ劣勢に陥っていた。その一因としてポルトガル領インドの中心からの距離をあげることができよう。ゴアとモルッカ諸島の往復には二三ヶ月から三〇ヶ月、マラッカとの往復でさえ一〇ヶ月半から二〇ヶ月を要したが、ヌエバ・エスパニャから出帆したサーベドラ隊はわずか三ヶ月で太平洋を横断したのである。しかし、太平洋帰航路の探索に失敗したことがスペイン側にとって大きな痛手となった。[2] この間にカルロス一世は議会（コルテス）の再三にわたる反対表明にもかかわらず、モルッカ諸島について有すると信ずる権利の譲渡を検討するようになった。一五二九年四月二三日、サラゴサ条約によってモルッカ諸島の東一七度に境界線が引かれた。カルロス一世は黄金三五万ドゥカドでその権利をポルトガル国王に売却したのである。[3]

こうしてモルッカ問題は一応の解決をみた。しかし、この場合の境界線はモルッカ諸島の帰属を裁いたにすぎず、これによって対蹠分界線が確定されたわけではなかった。少なくともスペイン側はそう理解した。それゆえ、両国はこれ以降もフィリピン、中国、日本などの帰属をめぐって分界の議論を繰り広げることになる。[4] ただし、その帰趨は分界論の展開よりも東アジアにおける占有の実態すなわち拠点支配あるいは布教と貿易の実績にかかっていた。バダホス＝エルヴァス

会議に集約される本国の議論は空虚なセレモニーにすぎなかったのであろうか。

事実、組織の問題としてみると合同委員会の構想は当初から矛盾を抱えていた。それは調停機関としての建て前をもたされていたが、本質的には両王権それぞれの諮問機関が寄り集まった組織であった。この矛盾は両国間の海事知水準の落差と重なりながら、占有問題の分離および法曹家の介入によって事前にさらに拡大していた。したがって、Lamb のいう「偉大な科学的事業となる可能性」の芽生えは会議の冒頭からではなく、その構想と調整の段階であらかじめポルトガル国王によって歯止めをかけられていたのだ。審議の経過を見る限りこの歯止めはかなり有効に働いていた。しかし、少なくとも分界の裁定にあたった人々の間には「広範な合意の場」があったのではないか。この Lamb の問いかけをうけてわれわれはそのなかで確保されていたと思しき共知について考察を重ねてきた。その成果をとりまとめておこう。

世界周航の完成はモルッカ問題を一気に加熱したが、そこで得られたデータは新たな共知の構築に貢献せず、むしろそれぞれがデータを隠匿、変造、盗用しあう傾向が強まった。その結果分界に関する共知は二重構造を形成した。表層にはプトレマイオスのパラダイムによるスペイン有利の共知があった。スペインの裁定者たちは当初プトレマイオスのパラダイムが提供する権威の傘の下に退避することでポルトガル側と折り合いをつけようとしていたが、審議の実質的な展開はその奥に隠されていたポルトガルの地理データに基づく共知をあぶりだした。深層の共知はモルッカ問題で有利不利が微妙であったため両陣営はたがいにこれを変造して対抗した。最後にポルトガル側は天文学的経度測定法によってそれまでの議論を清算しようとした。これはスペイン側の猛反発を招いたが、スペインの裁定者のなかでエルナンド・コロンだけはその方法を相対的に評価していた。むしろエルナンドが批判したのは相対的にすぐれた方法をもってしても実現が困難なことに両国があえて取り組んでいる点なのだ。

ここに至ってわれわれは Lamb 説を越えた地点に行き着いた。二重の共知を抱えた「広範な合意の場」は対蹠分界の解釈というもうひとつの政治性の強い共知のうえに成立していた。このような共知の危うさを告発したエルナンドもまた

会議の表舞台では自説の表明を差し控えたのであった。政治は共知の担い手たちの言動に強い影響力を行使していた。

① M. L. Diaz-Trechuelo López-Spinola, "Las expediciones al área de la Especieria", *Historia General de España y América*, VII, Madrid, 1982, pp. 325–29.

② V. M. Godinho, *Os descobrimentos e a economia mundial*, III, pp. 139–45, 153–54.

③ J. R. Coelho, ed., *Alguns documentos do Archivo Nacional da Torre do Tombo acerca das navegações e conquistas portuguezas*, pp. 495–512.

④ 高瀬弘一郎「大航海時代イベリア両国の世界二分割征服論と日本」『思想』五六八、一九七一年、八五—九三頁。

（新潟大学助教授　　）

（付記）本稿は一九九二年度文部省科学研究費補助金・奨励研究（A）による研究成果の一部である。

Sciences and Politics on the *Demarcación*

——the case of the Moluccas question——

by

GODA Masafumi

The spices from South Asia, especially cloves and nutmegs, were most attractive to the Europeans in the age of discovery. The Portuguese arrived at the Molucca Islands, the only natural home of cloves, for the first time around the end of 1512. However, the Spanish squadron commanded by Magellan (and after his death by Del Cano) called at the Moluccas in November of 1521, and the surviving ship of the squadron, the Victoria, arrived back home with cloves after its circumnavigation of the globe on September 6, 1522. This brought about the "Moluccas Question" between the Spanish crown and the Portuguese.

The matter was referred to the Spanish-Portuguese joint council at Badajoz-Elvas from April 11 to May 31, 1524. The council was divided into two committees, one consisting of astronomers and navigators to discuss the conflicting claims to the Moluccas in relation to the treaty of the *Demarcación,* the other consisting of jurists to discuss the legal status of its occupation. These committees failed reach agreement on the scientific and lagal issues.

U. S. Lamb insisted that the council had the potential to produce great scientific achievements and that there was "a large area of agreement" overriding politics at least among the members of the scientific committee.

In this article I examine the discussions in close detail, focussing on the common ground concerning the understanding of the *Demarcación* within the scientific committee and on the politicization of its discussions. In conclusion the common understanding had a dual aspect, a superficial one advantageous to Spain but also deeper one of which it is difficult to judge to whom it was more advantageous, for which reason agreement was not forthcoming. Moreover it had a political substructure, the idea of the "Antimeridian", which shut the door to another understanding of the *Demarcación.* Despite Lamb's view, the

scientific committee and its advisers were indeed heavily influenced by politics.

Chronology and Distribution of Shandong Longshan Culture

——with an emphasis on pottery——

by

LI Quansheng

So far, the temporal and spatial changes in Longshan culture in the province of Shandong in China have yet to be properly clarified. In particular, there is a marked tendency to take the chronology of a single site and treat it as the chronology of Longshan culture as a whole. In order to elucidate the chronology and the distribution of Longshan culture, the Shandong Longshan cultural area is divided into five areas in this paper. Through a stratigraphic and typological analysis of assemblages of pottery excavated from representative sites in the five areas, the various stages of Shandong Longshan culture are examined.

The chronology of Shandong Longshan culture can be divided into five periods using *gaobingbei, gui, yan, ding* and other standard pottery types as a basis. Subsequently, by means of this new chronology, seventeen different distributions of Shandong Longshan culture can be classified by grasping the characteristics of the pottery of each period. The characteristics of unbalanced development and fluidity of space which characterized Shandong Longshan culture are thereby clearly indicated. It is possible that the temporal and spatial changes in Shandong Longshan culture were caused by flood of the Yellow River.